

栗生の方言（三） な之部～ん之部

山崎，時造
鹿児島大学教養部助教授

崎村，弘文
鹿児島大学教養部助教授

<https://doi.org/10.15017/10389>

出版情報：文献探究. 28, pp.55-71, 1991-09-30. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

栗生の方言

(三)

山崎村崎

な之部
弘時
文造

著
監修

な之部

ない なり(着)。「―くだもん」果物。「―さがる」果物がたくさん笑をつける。

ないたつ なりたつ(成立)。

ないやがい 成り上り。俄か分限。

ないわする ならわする。教える。

なえ 地震。又半身不随。

なおい なごり(余波)。風が静った後なお波浪が残ること。又波の高いこと。

なおる 移転する。

ながぐち とら又はとら・うの風。北東風。

ながし なが雨。つゆ。「―むし」白蟻つゆの頃分巢のため羽を生じ飛ぶもの。

ながす 鯉を餌付けして船を止め潮流にまかせて船を流すこと。「なげーた」ながした。

ながすみ 中墨。甲て何れにも偏せぬ中庸の意見や措置。「―をとる」。

なかない 中ふる(こま)になつたこと。

ながぶつ ながひつ(長櫃)。

ながめ 眺め。途中怠けておそくなること。油を売る。

ながれふね 流れ舟。川に舟を浮べ水の流れにまかせて涼を喫する舟遊び。

なぎ ながきの木(榊)。

79オ

なきべす なきべぞ。泣き虫。

なけあーみ 投げ網。とあみ。うちあみ。

なじみ 馴染。戀仲。

なすいつけ なすりつけ。無実のことをなすりつける。

なたおれ おのおれ(斧折れ)の木材質堅く鉦も折れる木。いちいの木と共に構木に用いられる。

なつかばい 泣きみぞ。又泣いておるさま。「なつかばる」。

ななアーめー 七回の速命。一周忌三年忌七年忌十三年忌十七年忌

二十五忌三十三年忌の七回の祥月命日に死者の法要を行う。

なーにようがら 何はなくとも。何がな。なにはなくてもこれだけ

でも。 79ウ

なば きのこ。

なべ 「―いい」鍋煎り。鍋で茶を製すること。「―んつーい」に

じ(虹)又鍋のつりて。「―さーぎ」なべさぎなべづる。

なま 或語に冠してその意を強めるもの。「―こしやくな」こしやく

くなまいきな。「―はづかしい」。「―おかしい」。「―はら

んきわく」(大変に腹が立つさま)。

なます 錬えた金属を焼いて鈍らすこと。

なまる 鈍る。鋭利をなくする。

なーかーおられる 【説明欠】

なーみのほな かいめん。

なめ 白痢。又傾斜した岩磐又岩盤。

なめくぢら なめくぢ(蛞蝓)。

80オ

ならん かなわぬ、勝てない。

なる 成る。勝てる。「ならん」かなわぬ。勝てない。

なんこ 箸戦。八九センチの長さの棒三本を持ちその幾らかを握り

互に数をあてる酒間の遊技。

なんこやし 投げ越やし。こもづち俵などを編むときに糸を巻きお

もりをなし且つこれを交互に腰木の上を越して編むもの。又他か

ら物を貫つてから物を他へ与えること。又利己主義。

なんせん なんてん(南天)。南仙。悪魔除けにする木。手洗鉢の

側に植える。又葬送を見るときに南仙の小枝を髪にさす。

なんもんか なるものか。

に之部

にい 新い。「い」か「あたらしい」。「い」じょうよう「死者の霊のは

つばん。新精霊。

にがい にかり。

にがちま にかて(苦手)。にか肌の人の手。この手ではたけ(疥

を搔けばなおるといふ。又この手の人の作った料理物は苦味が

あるといわれる。

にぎー にぎり。けちんぼう。

にくわつと にくこりと。

にこしらかす 煮こじらかす。煮物が途中で温度が下ってよく煮え

ないこと。

にし おぬし。そなた。おまえ。

にーじん になじん(人参)。

にせー にさい。ニオ。青年。

にっしにっし 炎天に強く照られること。「日射日射」。

へ荷が積が片寄ること。

にろく 二禄。刈り取つた稲の後株から自生する稲。ひつぢ。おろ

かおい(櫓)。日本に稲が出来るようになったのは今から二千三

四百年前といわれておるが暖地では「にろく」の米も収穫してい

た。日本書紀天武紀にも種子島調査団の報告書にも梗稲常豊、一

種両収とある。

にわ 入口の土間。

にんごんたん にぎりめし(握飯)。

にんじつ にんじやつ(忍術)。

ぬ之部

ぬかる ぬかるみにはまる。又突き込む。突き通す。

ぬくい あたたかい(暖)。

ぬくめる あたためる。鶏が卵を抱く。鶏が巢につく。又かくす。

人知れず貯める。

ぬくもいる ぬくくなる。あたたまる。

ぬすと 盗人。「いもん」盗人どろぼう。「いだけ」盗人竹。黄の

子を編むときに下に直角において編み付ける竹。「いちょうちん

」強盗提灯(強盗は唇音がんどう)又電灯提灯。夜盗又は夜討な

どに用いられたもの。足下をまらし又用あるとき前方を照らすも

の。忍道具の一。忍びがんどう。

ぬつか ぬくい。

ぬっすい のっすり。

ぬっすぬっす のっすりのっすり。

ぬつつい のろいこと。遅鈍者。「いぼう」。

ぬるか ぬるい。熱くない。おそい(遅)。

ぬれしぼたれ ぬれしぼたれ。びしょぬれ。「ぬれしおたれ」。

ぬんたいざつたい 延びたり反つたり。遷延すること。精を出さな

いこと。怠けること。

ね之部

ねあがい 根上り。立木の根から樹幹に腐れが入ること。

ねいき 寝息。いびき。

ねいた 根板。船の竜骨(かわら)に接ぎあわせうわいた(上板)へ連結した船板。

ねいきー ねき・そば・かたわら。

ねざる ねめる。にらむ。

ねしげー ねりかい(練權)。權には三種ある。オール即ち打ち權。

オールの短いもの手權。オールの頭に丁字形に棧のあるもの練り

權の

ねこんばつちー ずばん下。「ばつち」朝鮮で花色絹布で仕立てた

股引。

ねーし 根石。沈子。網の両翼又は「いわ」につけて網を沈めるた

めのもの。いわ。

ねた 産褥についたこと。出産したこと。 83オ

ねぢき ねぢく。「ーまーる」強いてねぢく人。

ねぢく すなおに聞き入れられないこと。強いて反対すること。

ねとぼけ ねぼけ。

ねぼし まわた(真綿)。

ねぶいち ねぶと。

ねほいほほい 根掘り葉掘り。根から葉まで残りなく問い訊すこと。

ねまる 物が腐敗してすっぱくなること。すえる(鐘)。又以前の

ままであること。変らぬこと。「ねまいひよーい」前のままの日

和。「なんこ」で前と同じ数のこと。「ねまい」。

ねむい 「ーぐさ」ねむり草。「ーぐすい」ねむりぐすり。 83ウ

ねる ねりがい(練權)を掛け緒に入れ水中に稍く垂直に立てて漕

ぐこと。

ねんからねんぢやう 年から年中。たえず。常に。

ねんごう 木を削り地に立てたものを互に打倒す遊戯。又その道具。

ねんね あね(姉)。

の之部

のーの (布)。布のかづ。ふたの。みの(二布三布)。五のふと

人五布のふとん。

のい のり(法)。傾斜面。又のり(衆)。又着戦まきにおいて観戦者

が傍らから参戦すること。「のる」人は先づ酒を飲んで数をいい

言当【84オ】てた場合には「のられ」た人は二倍飲む。

のーい のり。苔。又糊。

のきたたみ 軒量。地がさがらないように軒下に土留めをしたもの。

又家の軒につける広小舞。

のこーの こぎり(鋸)。「ーすい」鋸すり。船板などはぎ付けると

き幾度も鋸を曳き板と板とが密着するように矧ぎ目を整えること。

のこいもん 残りもの。

のこくづ おがくづ。

のこめ 陸桶。日本に桶を作るようになったのは二千三四百年前と

いわれる。陸桶の赤米系であつたらしい。

のさる 天賦。げん(間)がよいこと。幸運なこと。

のさん しょうのない。やりきれない。どうもならん。 84ウ

のーたん 脳がわるいこと。頭がわるいこと。

のーち のち(後)。「のーちー」のちに(後)。

のっやい のっやり。呆然として立っておること。

ののこぬ ののこ(布子)。

のーか のび(野火)。野火事。

のーびる のびる(野蒜)。

のぼい 登り。足つき。又懺り。

のーま 大浪が連続して打ち寄せた後暫くの間波が静かになること。「ーをつくる」のーまをまつ。

のーみ のみ(蚤)。又のみ(撃)。又のめ(船繋)。まきはだ。

のみとい のみとり(蚤取)。「ーこ」のみとり粉。 85オ

のーめ のごまい。「のーめー」玄米。

のれ のれ(反)。雲が風向と反対の方面へ流れること。又のれ(延)。鉤がのれた。鉤が延びた。曲つたものが延びること。又たわむ(撓)。鋸がのれた。

のんのん 花又は月などの美しいものをさしていう幼児の語。 85ウ

は之部

ばいがえし 二倍の額を返すこと。契約を一方的に破棄するとき保証金の倍額を支払うこと。

はいずる 嫁が婚家から出ること。「はいせた」。

はいと 常に。いつも。

ばいにん あきんと(商人)。

はえ 南西の風。「しらー」白雲が覆うた南西風。「くろー」黒雲が多い南西風。共に雨は降らない。黒はえは梅雨の中晴白はえは梅雨あけ。又物を積み重ねること。「薪をーる」。又岩礁の遠淡になつてある所。

はおい はおり(羽織)。

はかい 血の流れおちたあと。血痕。又計り。又はかり(秤)。

はがため 歯固。お正月才一の儀式。餅を煮又は焼いたものを食べる。「86オ」餅は垂仁天皇の時大己貴命が元日に紅白の餅を一つ

荒神を祭ると因中の災がなくなると進言したので殊に正月の儀式として採用するに至つた。朝廷を始めとして庶民一般に用いられてある。粟生では餅の他に子孫を増すという意味から里芋を煮たものをも用いてある。

はき 多人敷費用を出し合わせて飲食すること(接ぎ)。

はきー はきり。「ーをかむ」睡眠中歯をきりきり音させること。はきしりすること。

はきたばき 苦しみ吐くこと。

はくめー 白米。

はくもん はくもの。足半草履。

はくらひ 舶米。上等の品。

はぐらかす はぐれるようにする。顧みて他をいう。不得業領になす。「ねー」唾気のさしたのに他に気を取られなどして寝つかぬようになること。

はくらん くわくらん(霍乱)。「てーー」よりろっぱこれらに類した霍乱の重いもの。

はぐれる 連の人を見失う。

はけ 捌けること。商品の売れること。又工程。「ーがあがる」。

はげ はんげ(半夏生)。

はこだんぼー 箱らんぶ。風に強くするために外側を硝子の四角形に製した洋灯。

はこすい のぞき眼鏡でのぞき乍ら魚の居る所を探して鉤を垂れて魚を釣る漁法。

ばさばさ 木の葉草の葉などを踏みしだく音。木の葉の触れ合う音。又波の立ちさわぐこと。

はし はし。箸。「ーかき」箸削り。又橋。又端。

ーばし 或る語に添えて疑問の意を表わす語。何々したかも知れない。「川にーいたかぬー」。「せーみといにー行つたとぢやろう」。「せみとりに行つたのかも知れない。又「けがばしするな」怪我してはならない。

ばーし くわすいも。「アロカシア」。屋久島は到る所に自然生が

繁茂してある。観葉植物として賞揚される。又前衛挿花として用

いられる。ヒリッピン原産の「コウラダイコ」が尤も有名である。

【以下、生育するまで別紙後貼】**ばーし** くわずいも。屋久島

には各地に自然繁茂している。今観葉植物として又前衛挿花とし

て用いられる。戦後の輸入ものとしては「アロカシア」が数種類

あるが観葉として「アロカシア」は十五、二十度以上の気温を必要

とするが「ばーし」は零下の気温でも生育する。

はしい はしり(走)。早出しの商品。

はじくい はぜ、はえ。

はした 赤橙。

ばーし 赤橙。

ばーし 赤橙。

ばーし 赤橙。

ばーし 赤橙。

はづかしむの 恥かしくもなく、おくめんもなく。

はっさきんど ハ丁櫓の最も櫓の方の櫓。最先の櫓。

はっしい 菌莖。

はずす 外す。「つなを―」綱をときはなつ。「ふねを―」出帆す

はったい 急に、俄かに。「―だれた」俄かに弱くなった。

はったい どうにも。「―いかん」どうにもならない。

ばっち 朝鮮語パッチ。花色絹布で仕立てた股引。

ばっちやぶい 張り破れる。はり裂ける。

ばっち ばーしと。ポルトガル語「バッチェラ」。西洋型の小舟。

ばーと 八斗。多量。たくさん。八斗は八斗の才。詩文の才能の

豊富なこと。倚馬の才七歩の賦を併せていふ。李白韓荆州に上る

書に「請、試方言、倚馬可待」とあり馬に倚り掛って待つ間に千

方言の美文をなすだけの才能があるというた。魏の文帝曹丕は

弟曹植の才能を忌み且つ恐れていた。或る日曹植に対し七歩の間

はつめい 発明。はつきりさせること。幸直にいうてのけること。

「ーもん」発明な人。

はなあぶら 鼻油。「ー」をつける「物を大事にすること」。

はないき いひき。

はないろ 花色。赤色。

はなうち はなうち茶々碗(鼻打茶々碗)。茶々碗の大きく高いもの。茶を飲むとき鼻につかえるもの。天目。

はなえ もり(銚)。

はなお 下駄の鼻緒の指にはさむ所。

はなぐい 鼻木。牛の鼻に通す輪。

はなじろう はまち。ぶりの幼魚。ぶなやご。

はなすい めじろ。

はなたい 淡汁。又はなしるを垂れておる人。はなたれ。

はなたかたご 山の字型になった菓子。もち米の粉又は麦粉に砂糖

を加え又あづきを加えて黒白の団子とする。月祭りに用いる。製

菓するときの形は女の性器に像つたもの。又麦を煎り粉にしたも

のを「こうじき」といい、これをこねて前と同じ形にしたものを

水神祭の供物に用いる。

はなどん 花園。庭園。

はなばしろう 花ばしろう。美人蕉。

はね はご(羽子)。「ーうち」はごつき。

はなばい 茶鍋で茶を煎ること。老母などが焙爐を用いずに平たい

鍋で製茶すること。

はぶつる 前後も忘れて一所懸命になること。

はまー 破魔。正月子供の遊技。竹製の弓に鏃の付いた矢をつがえ

橙又は円板を地上を投転させるのを横から射る。「ハマー・オテ

ー(破魔・落ちよ)」と掛声を発する(投げる方が「はまー」と

いい射る方が「おてー」と叫ぶ)。次に投げ役の方が射留めた

橙を射て当れば引分けとなる。

はまがーし はまゆう。又はまかし。

はまみる 決見る。潮が干て川の砂洲が大きく現われること。干潮。

はまやき 魚を塩山に這わせたもの。めでたい儀式の祝物にする。

はまる 勇気を奮いおこす。精を出す。

はめつける 精を出す。がんばる。はげむ。

はめく 荒い風が吹くこと。強風。又しまく(風巻)。

はもん 刃物。

はやいびよう 流行病。

はやさばけ 早裁け。早く結果が判ること。早く成果があがること。

はやす 言いふらす。

はーよう 早緒。櫓なわ。櫓をつる緒。

はらかく 腹を立てる。

はらがましい 腹が弱いこと。食あたりなどがしやすいこと。

はらごう 魚の腹部。はらがわ(腹皮)。

ーはらだつ 調子に乗ったさま。「といー」調子に乗ってよくとる

こと。「いきー」行く気分になり切つてあること。

はらんきわく 腹がわき立つ。「腹が立つ」を強めていう語。

はーろむ はらむ(孕)。みごもる。妊娠。

はんかー はかり。「ーをかむ」睡眠中歯を磨り合せてギーギーと

音を立てること。

はんきい 半切り。半切りおけ。

はんきゆう 半休。半日の休暇。土曜日、半どん。

はんげー 櫓の早緒を取りつけるもの。

はんちく はんば。物が欠けて全部揃わぬこと。

ばんつけ 夕方。晩方。

はんどう 帆柱を立てるときに張る網。柱引き(帆統)。又水がめ。
はんぱうちー 短かい股引。膝まである半ずぼん、半股引が丁度程

91ウ

よい位の短身者。
はんばもん はんば者。悪さをするもの。順当でない人。

ぱーん 物を投げつけること。幼児の語。

ばんぱーんと 遠く開くこと。距離を大きくすること。「―ゆけ」

網をはるとき船と船との距離を大きくして網を広く張ること。「
とひらけ」。

ひ之部

ひ 忌日。命日。

ひい 備前。蘭草。三角蘭(セ島蘭)。

ひいなひいな 脾弱いさま。弱々しいさま。

ひえこーす 冷え凍える。

92オ

ひえん さしみ。又新鮮な魚。生魚(ぶえん「無塩」)。「―こぎ

鮮魚運搬船。

ひがらめ すがめ(眇)。斜眼。

ひーがん 彼岸。

ひぐらもと 日暮れもと。夕方。

ひこうする 比較する。

ひこね 孫根。蔓から生じた根についた根塊。

ひさま 日様。太陽。

ひしゃーん みさこ(雌鳩)。

ひすきー 火すくい。じゅうのう(火斗)。おきかき(熄接)。

92ク

ひだいまき 左巻き。ねぢけもの。

ひぢけ 失敗。「―た」失敗した。赤毛布を□□した。ヤリヤこな

った。

ひづかい ひづかえ。忌服中。又その着。

ひつくひつく 氣息絶えだえなさま。

ひっしお 引き汐。ひしお。

ひっせ 風下の方の帆脚。「―をとばせる」強風のとき「ひっせ」

を解き放すこと。

ひうちぎる 引きちぎる、もぎとる。

ひとまーい ひとまわり(一週)。一週間のこと。眼の養生は三日

一週い。

ひどる 火取る。表面に火気をあてること。又ひざる(乾反)。木

や板などが乾いて反ること。

ひなたあめ 日照り雨。

ひね 古米。春きの足りない米。精白度の低い米。

ひのこまーつ ひめこまつ。材質の弱い大きくない松の木。

ひばかい ひばかり、やまかがし。全身に紅黒色の斑点あり。背部

の鱗は一列十九個。挙動敏捷なるも無害なり。

ひばこ こたつ。

ひまわーい 日まわり。

ひや ひわ(枇杷)。

ひやか さむか。寒い。つめたい。

ひややーめん 冷しやうめん。

ひよーい ひより。「―げた」ひより下駄。厚齒で高下駄よりやや

低いもの。

ひよこし ひおこし。火吹竹。

ひよっかい ひよっこり。又不用意に。「―手は出せん」。

ひよっかひよっか ひよっこりひよっこり。しばしば(屢)。

ひよる 避寄る。身を避けて片寄るさま。

ひよろつく 見えかくれに行ったり来たりするさま。風の如く去来

するさま。

ひよんな 不思議な。

ひら ひらわん(平腕)。

ひらけた 粹な。

ひる んにく。大蒜。又かいこの蛾(蚕蛾)。又山ひる(燈)。

又昼。

ひろしき ひろしき。

ひろつく 一寸姿を見せること。

ひろつとも ひろつきも。一寸姿を見せるだけでも。

ひんた あたま。

ひんだれ 髪たらい。顔洗いのたらい。古くは足高の木製の盥。

ひんね ひるね。

ふ之部

ふ 運吞天賦。

ぶ 不。「—なかつこう」不格好。

ふいかふい 糞を垂れて衣類などをよごすこと。

ふいせんもと 冬せんもと(冬蕙)。わけぎ。

ふうくわたい ふうご(籬)。

ふかい ひかり(光)。「ふがる」ひかる。

ふかふか ひかひか。電光。いなひかり(稲光)。

ふきまーし 引返し。腰巻き。湯文字。

ふく 沸く。沸とうするさま。

ふくゆう ふく菌。燈心を採る菌草。

ふけ くけ(紵)。

ぶげんしゃ 分限者。

ふさふさと ひたひたと。直かに握るさま。「—とにぎる」唯た

唯たとにぎる。

ふしよう 不正。欠点あるさま。過ち。誤り。

95ウ

ふすのいお しいら(鱈・鯨)。

ふすめ いぶす(燻)。「—る」いぶす。

ふすもうる くすぼる。煙がうづまく。

ふせ 補せ。衣類などの補綴。「—つづい」ふせつづれ破れたところ

ろに他の布地を接ぎ合せたもの。「—こくる」つきはきた上を

更につきはぎすること。「ふせ」が多くなること。

ふたいか 脾たるか。ひもじい。

ぶたれー ぶざま。しまりのない。

ぶち ぶち(鞭)。

ぶつ よもぎ。「—んもち」よもぎもち。草餅。又ひつ(櫃)。

ぶつかがみ ひつかがみ(脰)。

ぶつこがわーし ひき粉菓子。もち米を煎りて粉にした(いりこ)

ものに砂糖を和してむした菓子。黒砂糖を用いるを本体とする。

ぶつこぼす 沸きこぼす。煮こぼれる。

ぶつしよう 仏に供える米へ仏に奉る米飯を仏餉「ぶつしよう」と

いう)。

ぶつたわーき 雨が降つた後。

ぶつつい 他人に物言うことの出来ない柔弱な性分。又小さな声。

「—ともいわん」。

ぶつとい びつしより。「—ぬれる」びしよぬれになること。

ぶど 不度。たくさん。

ぶとう 太いこと。「—でーこん」ぶとう大根大丸大根。又ぶと(

嬢子)。

ぶとーぎ しとき(菜・糍)。「しとき」は(朝鮮語「もち」)米

の粉で長卵形に作った餅であるが屋久島では祝儀のときにつくる。

紅白又大小あり投げ餅は小さい。なげもち(投餅)。

ぶとつとし 一っ年。同年。

96ウ

ふなかた 船方。船の乗務員。

ふなとう 漁夫（番丁は南方の海人の若者、あまびと、あま）。

ふなばら 船腹。

ふふ 火火。火のこと。幼児の語。

ふらふら 睡気を催してこっくりをすること。

ふりりー ふるい（篩）。ふるうこと。又ふるい（覆）。ふるえること。

ふる 糞をふる。尻をふる。又箕で穀物などを篩ること。

ふれーもん 拾いもの。拾うたもの。又掘出しもの。

ふう 風呂。又かまど。

ふうう 拾う。

ふうぞう 広袖。ふとんの下に用いる寝具。夜着。

ふうとぎ じろの火のときにくべおく大きな薪。

ふんかぶる ふみつける。

ぶんごよき 豊後地方の山師から伝った斧。刃が広くないもの。

ぶんごろくひ 豊後方面から伝った負い子。角のあるもの。「とい

さん」ともいう。背に当る所に「しゅうた」をつける。

ふんぬく 引き抜く。

ぶんまわし ぶんまわし（筆規）。

ふんめし ひるめし（昼飯）。

へ之部

へー はえ（蛭）。又ほう（通）。又はい（灰）。

べー あかんべー。舌を出してあざけること。

へいや 閉屋。なんど（納戸）。

へーが へぎ。薄くとること。「ーたけ」へきた薄くした竹。「

ーいし」へぎ石薄くへぎ取った石。

へーくぞがづら へくぞがづら（尻屎葛）。

へーご へご。

へーごたい かい（權）。うちがい。

へこばち しゃりんばい。材は染料となり（カ^ツ子^チを製す）実は食用となる。

へす あなどる。

へた 岸に近い水面。「ーくぞ」大へんに下手。

へーつくべー はいつくばい（違い躰い）。

べったい たくさん。又べつとりと。物がつきやすいこと。「べつ

たへつた」。「ーだご」もち米の粉に砂糖を和して蒸した菓子。

へつと とつさに、声に応じて。「ー立ちあがる」。

へづる そぎとること（殺取）。

べーら 小さい薪。柴木。

へわ 菓を丸く編んで作り中央は空にする。こしきと釜との間又

釜とせいろとの間に挟み湯気の出るのを防ぐ具。「しゅうた」よ

りは厚いもの。

べん べに（紅）。「ーがら」紅唐やや黒味をおびた紅色の塗料（

紅唐色）。

べんが べつな。

ほ之部

ほあーし 帆脚。帆の下に垂れ下った綱。掛けた帆を堅めるための

もの。

ぼーい とんぼ。ほんぼーい・やんめぼーい・あかぼーいなど種類

が多い。

ぼーいどん 布衣殿。神主。神職。

ぼーいぼーい 葬儀のとき先頭に立つ燈籠。

ほがす うがつ。

ほうきざや 帚鞘。獣の毛皮を鞘の末尾につけたもの。しりざや。

ほうきばし 帚星。彗星。

ほうける 放(はな)ける。女狂い又男狂い。

ほうこう 奉公。勞役奉仕。

ほうじき ほうづき。

ほうちきれ 棒千切れ。棒の切れはし。

ほうてー 【この項、別紙貼付】 風袋。

ほうどう 【同】 ほうぎょう(宝蔵)。銭などを入れる袋。

ほうどく 【同】 骨膜炎。

ほうのねー 方のない。あてのない。信用出来ない。頼りない。

ほうばれ 耳下腺炎。

ほうふい ほうふら。

ほうぶき ほうびき(宝引)。紐のくちを引くとばく。明治初年までは正月三日間は公許されていた。

ほうぐ ぼぐ(反故)。紙を綴り合わせた手習用半紙。

ぼくゆう ぶくりよう(茯苓)。

ぼけ 冗。「ーる」冗があく現金が帳尻より不足なこと。「ーたん」深くぼけた冗。

ほこれ ほこり(埃)。ごみ「ーかぶる」ほこりだらけになる。

ほーしい ほしいい(干飯)。

ほじい ほりおこす。「ーをとる」開墾の鉤入れをする。

ほしきーれーだす 星さらけだす。星がさえて数多く輝く。

ほた 玉切りにしたままの材。又頭のからっぽになつてゐる人。「ーんちん」少々足りない人。

ほちやくる ただれたように皮がむけるさま。ほぐれてふわふわになつたさま。

ぼつきい もろく折れること。「ぼきぼき折れる」。「ーおれた」。

ぼっくい ぼっくり。急に死すること。又裸下駄。木履。

ぼっけー 猪勇。「ーけん」猪勇にはやる人。

ぼつてー 古けた仕事着。つきはぎだらけの着物。

ぼて バテ。

ぼとけ そとば(卒塔婆)。

ぼとかれる 水に長く浸つてふやける。

ぼないい ほなり。帆を上げたときの姿。

ぼねんせれちえ ほねがそれて、骨おしみになつて、勤勞意欲がなくなつて。

ぼぼ 女の性器。

ぼーぼー 火が盛んに燃えるさま。

ぼめか 暑い。

ぼめく 火めく。暑さを感じる事。

ぼやしい 心もとない。頼りない。

ぼろ 羽毛。「ーををする」羽替えをすること。「ーくい」曳糸漁法

ぼろひき。

ぼろ 竹筒に石油を入れぼろ切れ又は藁などを心として火をとぼすもの。

ぼろぼろ くよくよ。ぼやくさま。

ほをまく 帆を巻く。帆を掛ける。帆を上ぐ。

ぼんさん 坊さん。僧侶の呼称。

ま之部

まーい まわり(週)。「ひとー」ひとまわり。一週り。一週。一週間。

まうけ 真受け。真正面から受ける。

まえ 庭(前)。「ーがたい」前談り。前座。

まき つむじ風。

まーき まき。「だんご」を葉に包んで蒸したもの。米粉栗粉など

を用いる。

まぐれもん まぐれ廻る人。住所不定の徒。

102ウ

まぐろしび

まぐろ。しび(鯖)は種類が頗る多い。普通のしびと所謂まぐろとは同じでない。どんなしびでも大きなまぐろになるという訳ではない。まぐろ、とんぼなど三十幾種に分類されてある。

まげ まつげ。「さか」の眼珠の方へのひたもの。

まげー まがい。本物でないもの。

まげられー 負けきらい。

まげる かぶれる。中毒すること。

まご つか(杖)。又かゆい所を掻く具。

103オ

まーし まわし(廻)。ふんどし。又廻し。「ー」。「ニ」。

ましお 真塩。食塩。

まじくる かきまわす。かきませる。まぜくる。

まじぬー まじない。

まぜくる かきまわす。かきませる。まじくる。

またづら 又伝ら。言い付ったことを直接自分で折衝せずに余人に頼んで言うて貰うこと。又伝てにいわせること。

またばしー またばし(股)。またぐら。「ーんこうやく」股につ

103ウ

けた膏薬でどちらにつくとともに知れぬ去就不明の者。

まち 鉤の先きに逆につけたとけ。戻り。又町。「ーよい」町寄り。

道路下の集會。

まちち まち(町)。通り。「おー」通路・道路。

まちえ までばしい。「ーんき」までの木。待てば椎の木。

まーつ 松。又脂松のたきつけ。又は燈火の脂松。

まっつら 真面。

まっつー 待った。その通りだ。そうだった。

まなか 閑中(閑舎のなか)。はばかり・ちようず(手水)。雪隠。

まねがつお 閑舎。閑所。後架。ひどの。かわや・やんごとなきところ。便所。

まなご 桶や樽などのくれ(樽)が振がれて食み出したもの。

まらち 男の性器。

まらかす まどかす。たばねる(束)。ひとまらかし一たば。

まーる まる(虎子)。便器。

まるき 丸木。丸木舟。

まんたい てまり(手鞠)。まんたいは海綿を心にしてかせ糸で巻き適當の大きさにしたものに糸糸で紮けて色々の模様を表わしたのである。「まっつー」ごむまり。

み之部

104ウ

み身 自分。「ーども」私達。「ーどが」私達が。

みかける 想いをかける。ほれる。

みかわ にかわ(膠)。

みき 幹、ろへら。

みすくみ さんすくみ(三竦)。

みそがーい みそがゆ。

みそちーい みそさざい。

みそやき 味噌を灸点にのせそのみその上から灸をするもの。

105オ

みづ 水平。又水平器。「ーをみる」。「ーあぶら」水を油の代用とすること。

みづあげ 水揚げ。漁獲高の全部。粗収入。又女子の初めて男を知ること。

みづさし 水てっぽう。

みっしお 満ち潮。満ちて来る潮。みっちお。

みっじよがしうせー みつ女が世帯。有れば有るにまかせて無計画に浪費する世帯ぶり。

みつちお 満ち潮。満ちて来る潮。みつしお。

みづまつい 水祭り。死者の忌日又は命日にする法要。

みな なみ。

みなお 水繩。帆綱。帆を巻くときに用いる引き綱。

みーなか むいなか。無慈悲に。かあいやうに。

みのーい 尾根。

みのわた 大腸。

みぶい 身振り。

みぶりー 身震い。

みみくさ ゆきのした。耳の痛むときなど葉をしぼり汁を耳に入れる。よくきくという。

みみじゆら みみづら(耳面)。みみのあたりの面。

みみだき 木くらげ。

みみつん みみつんぼ(耳聾)。

みよせ みよし(舟首)。

む之部

むいなか むりな。かあいやうに。

むかすね 向う脛。「わが―じゃ」自分の負担損害となる。

むかむか 胸わるく吐気を催すこと。「―する」。

むかわいづき 満一年になった月。一周期。誕生日。

むき べつ(別)。「―せんか」別にせよ。

むけらい 迎けらい。嫁入り。

むすび 結び。握り飯。

むすむす 興奮して肉躍る気持ちなさま。

むぞか むぞい。かあいらしい。

むた めた(饅頭)。みそとすとを和したものの。又むた。湿田。「―だ」湿田。

むとうむねー 見とうもない。きたならしい。不潔な。

むら 村。屋久島の各部落は昔時各々一村をなしていた。その名残で今日でも部落のことを「むら」と呼んでおる。又部落の中心部をなしてある所を「ひら」という。「―にいた」村へ行った。

め之部

めー 正月十五日の小正月に白金黄金にかたどり白(米)黄(粟)の小餅をつくり柳の枝につけてこれを家の中に差。又椎の若木を刀架けとして亭主柱に立て刀架けの小枝小枝にも「めー」をつける。二日に取り下げる。又まゆ・藪玉。又まい(舞)。「―ど」

舞戸。間に穴をあけ戸まらを入れて開き戸にしたもの。又「―い」

舞舞。又めい(婬)。「107ウ」又まいり。「たけ―」岳参り。

「たら―」寺参り。又本来の姿。「夏は汗の出るのが―のもんぢや」。「焼酎はからかとか―ぢやよ」。本命。

めぐも 水平線上の雲。この雲の動きによって風の方が判然とする。目雲。

めぐらもち むぐらもち。

めーこ、うえーこ 姪子・甥子。近親。

めしげー めしがい(飯匙)。

めしごーい 飯行李。飯を入れて携行する楕円形の行李。竹又は籐などで作る飯入れ。

めしごーき 飯茶碗(「ごーき」はごき椀)。

めしぼーち 飯鉢。椀の薄板を曲げて造った飯入れ。漁や野山へ行くとき飯を入れて持ち行くもの。「―んす」飯鉢を入れる簍。

めたし ばらづみ。船に積荷するとき容器に納めずにはらのままにすること。又積めるだけいっぱい積んであること。

106ウ

106オ

105ウ

107オ

108オ

めたんだ めたたれ。眼が爛れてあること。

めつかん 目にかからぬ。またお目にかからぬ。お早うござい
ます。

めっさい がつかり(滅^清積)。失望。又重い石などを落とすときに
発する語。

めつぶら 目潰ら。盲目。

めのもる 目の廻る。目まいする。

めぶし 腹肉で製造した節。

めいろー 女郎。下女。

も之部

も 葉。ほんたわら。

もーい もる(守)。子。又もる(漏)。あめー。

もいのき 榕樹。亜熱帯喬木。

もうかくれ かくれんぼ。

もうす 申す。ます。「いい」「しー」いいです、しますいい申
すし申す。

もうぢ 網地。やうきん。網の切れ布をやうきんにしたのでいう。107オ

もーえー もやい(紡)。又頼母子講。又共同して催(まも)うすこと。

もが さらい(竹把)。まぐわ(馬銚)。馬把、把。

もちぢね 餅つききの杵。又杵杵。

もちもぢ もやもぢ。

もつ 産む。子をもつ。卵をもつ。

もっこう ふご(番)。竹又は縄でつくり土・石などを運ぶに用い
るもの。前後を二人で持つもの。

もつれる 入れみだれるさま。又じやれつくさま。「あしー」のする
「足にじやれつき歩き方にじやますること。」

もーてー もとゆい(元結い)。

107ウ

もとぶ 指先きの腫れる病。療症。

もとーる 最後まで保つ。

もーへー もはや、こんなに早くから。

もやしい たやしい(まよ)。簡易なこと。もやすか。

もやすか もやしい。

もやのしようべん もや(嚮)の小便。高山での降るともな時霧雨
もーる もる(漏)。

もーれん 船幽霊。逆風に帆を揚げて快速してくる。或は櫓拍子勇
ましく漕いで来る。本物の船と衝突寸前にパツと消える。或は兀
然として岩礁や島が出現する。本物の船が選(せん)せず(ず)に突進すれば
忽然として無くなる。かくの如き事を数度繰り返しておると本物
の岩礁や島に乗り上げ遭難する。或は海上で遇うて「えなご」を
借せという。そのときはえなごの底を抜いて与える。若し普通の
ままのものを遣ると忽ちにしてこちらの船は水船になつて遭難す
る。

108ウ

もろ むろあじ(室鱈)。赤もろ青もろ等種類あり。

もろう もらう。

もろぶた 諸蓋。一枚の広蓋。もちなどを入れるもの。

もんつき 紋付羽織。

もんめん もめん(木綿)。

や之部

や 鉄または木でつくり物を割るに用いる(扱)のような形のもの(切
り鉄)。

やいくいやーれー やりくりの上にも更にやりくりをすること。

やいやい やりやり。前後の顧慮なく決行すること。「ーのすけ」
かまわずにやる人。

やかましい さわがしい。又厳格な。「ーひと」。

110オ

やきもん やきもの(焼物)。せともの(瀬戸物)。

やくおとし ついな。又祈禱で厄拂いをする事。

やくてーむねー やくたいもない。必要のない、益にたない。

やくわー 矢筈。

やけ 夕焼け。朝焼け。

やけのやんぼち 自暴自棄。

やげん 家軒。「草が―にあがった」草が家の軒に届くように生え

茂つてあるさま。草の繁茂せるさま。「―にのぼる」。

やしねー 船のやねやしない(養)。潤滑脂。船の楳につけてまわ

りをよくするための「びんつけあぶら」。

やーせー やさい(野菜)。

やせまご 孫の孫(玄孫)。やしはご・やしやご。子孫ひまご(孫)やせ

ま(玄孫)。

やたらむたら 「やたら」を強めていう語。

やっけー やっかい(厄介)。

やっさくさ 論議紛糾して収束できぬ有様。

やっさやっさ 重い物をやっとの思いで背負うてあるさま。

やっしやし やっさやっさ。

やっとかつと やつと漸く。

やっとも ややとも。「―しちえ」ややともして、ともすれば。

やっばい やはり。

やなごい 柳行李。

やーねー 船の屋根。

やねうち やにうち。煙草盆に添えた竹製のはいふき(灰吹)。き

せるを叩き吸いながらや「やに」を打ち出すもの。

やほー やほ(矢帆)。船の軸にかける帆。弥帆。「―ばしら」矢

帆を張る帆柱。

やま 重量物を曳き又木とい網などを綯うときに用いるろくろ(轆

轆)。目印しの地点。「よう―をたてんにヤー」よく目印しの地

点を見定めなければ。「―をたてる」目印しの地点を見定めるこ

と。

やまいも 酒に酔うて文句をならべ又は乱暴すること。「―ほい」

酔うてくだをまくこと。

やまし 山師。林業を営む人、山人、木挽。

やまたろう 松の枝木に石の重しを附けた原始的な碇。明治三十

年頃とそれ以前と二回栗生の上部落で井戸掘りの際やまたろうを

発掘したことが二回あった。栗生部落の殆んどが曾つては水底で

あつたことが証明される。

やまどい 山採り。山床で材を造るとき實際必要分量よりは大き

くして製材すること。

やまひめ 山に居る魔の美女。美しい着物を着て髪は解け髪になつ

ておる。山姫に会うたときには山姫よりも早く笑わねはいけない。

山姫から早く笑われると命が助からない。明治三十何年の頃萬助

という人が東の野の山で山姫から強姦されて精を吸い取られその

まま寝付いて死んだ者があつた。又栗生の奥山で確かに見たとい

う人もあつた。けれども山姫の顔を確と見た人はいない。厲気楼

の作用によつて生ずる影だと説明されるようになった。

やまんもん 青大将。

やーもーも 山もも。

ややけ 鹿の腹中にたまりある血。鹿の血。栄養に富み殊に婦人の

血の薬だといわれる。

やわやわ しづかに。荒くせぬ。除々に。

やわらしい 和わらしい。痛みが和らいだこと。又やわらかなこと。

やんめ やんま、とんぼうの一種。又取りどころのない愚か者との

のしる語。

ゆ之部

ゆうちかせる 言いきかせる。おしえる。さとす。

113ウ

ゆき 吟喟。又敷。又みそれ。山が雪だからいう。

ゆすぶる ゆさぶる(揺)。

ゆっくい ゆっくり。

ゆつきゆつき ゆさゆさ。草木が生い茂ったさま。

ゆてる うで(茹)。

114オ

よ之部

よー 承諾の意。「おお」。人の呼ぶに答えて男は「よ」と女は「お」と申すなり。

よあけ 【説明欠】

よあけんくらみ 晩闇。

よあーみ 夜網。時刻が来ないのに夜ひそかに用いる網。とび魚と

りには特にやかましくいわれる。

よい より(寄)。「―かた」寄方。寄り合い。又より(経)。「

―あわせ」経り合わせ。又より(擇)。「えらびとる。「―どいみ

どい」択り取り見取り。

よーい おーい。おお。呼ぶに答える語。

よいき よりき(寄り木)。流木、浮木。亀が首にはさんだ浮木は

漁の守りとなる。これを発見したときは代りのものをやっつて亀の

浮木を取り大切に祀るのである。大漁につぐ大漁あり。

よいちやほつ 仕事の仕方のできなことを侮つていう語。

よーいられー 風の強く吹いて来るときに唱える語。「風よちれ」

との意。

よいづき 閏う月。【以下「…」という。』まで別紙後貼】閏日太陰曆

は一年を三六〇日とする。太陽の回帰年は三六五日五時四十八分

四十六秒(三六五・二四二二日)で毎年五日余の残りがあつた。この残りが積り積り一月に満ちたとき一年十二ヶ月に一月を加え十三ヶ月とする。これを閏う月(より月)とする。大抵五年に二回の閏を生じ十九年に七回の「よい月」を重ねて余分が全くなくなる。これを一章という。

よいとない 木遣りの掛声。又よいとない(浪)。浪よしづまれ。

大浪が船に打ち寄せるときに唱えごと。

よーいなこと ようやくのこと。

よーいよーい ぞろぞろ。

よか よい。立派。「―もん」立派なもの。又より。「こいー」

「こいー」これよりもそれよりも。

よかしこ 相当な分量。よいたけの分量。

よがわい 地震のとき唱うる言葉。「―よがわい」。

よき 斧。「ぶんごー」豊後地方の杓から伝つた斧。

よーき 夜着。夜具。「―ふとん」夜具ふとん。

よくもん 欲者。けちんぼう。

よくれーぼー 酔い喰え坊。泥酔者。酔いどれ。

よくろう 酔い喰う。酔う。「さけに―」船に―酒酔船酔。

よこう いこい。休息。やすむ。

よこし 脾臓。「―がかなわん」勞れ果てて身動きができないこと。

よごもい 夜籠り。夜神社などに参籠すること。

よしもと 葦原。いま吉元に作るは誤りなり。乗生の民家所在の大部分は古昔内湾になつていたので今の「よしもと」方面は水迎で葦原であつた。明治三十年頃とそれ以前と二回上部落で井戸掘の折りに山太郎が出土した。山太郎とは松の枝木に石を結え付けた碇である。この碇が地下十余尺の箇所から出土したことは当時水底であつたことの証明である。

115オ

114ウ

114オ

114ウ

114ウ

114ウ

114ウ

114ウ

よきもん よきもの(他所者)。

よだれ よだれ(涎)。「—くいしよだれたらし。」

よたき 夜燈をともして魚を釣ること。又夜火をたき餌になる。「いかしなどをとり沖に出て底魚を釣ること。この場合の釣糸を垂れることを「なわをたてる」繩を立てるといふ。垂直に糸を垂れる故にいふ。

よついで えつり(様)。「—だけ」えつりに用いる竹。茅葺き藁葺きなどの屋根に茅などの下垂木の上に葺茅の下地にこしらえた竹。

よつなき 船を繋留するために延え渡した太い綱。

よつくろう ふくろう。

よーっと 静かに。ひやかに。

よなかさなか 夜中最中。まよなか。

よなき 夜風。夕なぎ。

よなけた 夜があけた。

よーなる よくなる。全快する。

よのいる 日がくれる。夜になる。

よのみてー 夜おそくまで。夜更けるまで。夜通し。

よーか 呼び木、梁や差物や柱などを固く締めつけるために用いる

榿木。榿がはいるのを「よぶ」といふ。「—くさーび」。

よびつける 命令的に呼びて来させること。

よびよび 弱々しいさま。

よぶ えむ。粟の穂(いがい)や椎の実の外被などが実が成熟して裂けて開くこと。

よべ 昨夜。

よーべー 夜這い。

よま 縊り麻、糸の大きなもの、そ(緒)。

よまーい 夜廻り。

よめし 夕飯。

よめじよう 結婚連齢期の女。「よか—」美しい女。

よーよー 足の蹠。

よろよろ よろめくさま。

よわたん よわむし(弱虫)。

よわる 魚などの鮮度のおちること。

よんが ほうせん花。瓜をよんがで染めれば蛇の害を免かるといふ。「つまくれない」。

よんびよんび 弱々しいさま。

よすいうえー 留守祝い。家人が旅行した折りにその道中の安全を祈るための祝い。

よすこと 神様が出雲へ出張の留守中に宮篋りして酒肴を供え道かに神様の労を慰め奉ること。

ろくび 負い子。六部の負いづるに似ているのでいう。朝鮮式の角のあるものを「とつくえ」又は「ぶんごろくび」といふ。

ろくろう 六道。迷界の有情が業果として必然到るべき六種の境界。すなわち地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六界。法華宗で墓地内に設けた葬場。

ろのうぜ 槽の腕。船に用いるろのうでぎ。

わえ部

わい おまえ。わーい。「—が」。「—どんが」。

わーい おまえ。「—ども」。「—が」。「—が」。又割り地。

わいご わりご(割篋)。握り飯。

わいわい われわれ(吾々)。

116 オ

115 ウ

117 オ

118 オ

わが あなた。「—ども—」「—たち—」あなたがた。

わかきもん 若狭物。漆塗物の食器類。

わがしんめい 銭が身の行末。

わきのこ 木材を縦に挽き割る大鋸。

わきろ 脇櫃。ともの間の次ぎの間へ胴のまゝに設けた櫃。

わく 材を挽き別ける。

わさわさ 明朗な立居振舞。気軽な物言い。

わす おわす。「わすんどかい」おいてになりますか。「わせんか
よ」おいてになりなさい。「わした」来られた。「わする」あら

れる。

わせんか おいでください。

わだいな 恐るべき。「—となりね—」大変な奴だ。「—もんぢや—
仰山なものだ。たいやう。

わだわいか 災いになるほど仰山な。「—しこ—」大変にたくさんな。
「—な—」恐るべき程。「—か—」恐るべきもの。

わっこ 和子。目下のものに対していう語。おまえ。

わっしわっし 身も世もなまきま^{なまきま}でかゆきをかくこと。

わなぐ いちひの皮などを剥ぐこと。

わやく 邪魔すること。悪さすること。じょうだん。

わらうち わらたき槌。さいこん。

わらすべい わらしべ、わらくづ。

われもん 割れ物。

わんや わがが。あなたが。

わーんとなる 身の毛がよだつこと。

ん之部

ん うん。

んぢもう あらま—。

117
ウ

119
オ

んで ま—。「んでんで」ま—ま—。意想外の出来事に驚いていう
語。

んども 自分^{まじ}んども。おれたち。「んどが」自分らが。

んにや— いいえ。否定の語。

んね 姉。

んば おや。「—んば—」おやおや。

ん—ば— おやまあ。

んばおやし 乳母育し。祖母などのあまやかし育てること。

んまか うまい。

んまとい うまどり。

んまんこ うまのこ。子安貝。

120
オ